

弥生時代後期における近畿北部系土器の展開

桐井理揮

1. はじめに

丹後を中心とする近畿北部地域は、弥生時代の後半期において鉄器や玉類などの手工業生産の分野で畿内と比して卓越する先進性を有しており、さまざまな観点からの研究が行われてきた。とくに弥生時代後期には三坂神社3号墳や大風呂南1号墳など当時の本州では類を見ないほど豊富な副葬品を有した墳墓が構築されるようになる。この背景の一つとして、近畿北部地域が畿内地域との鉄資源をめぐる交易で重要な地位にあり、勢力を拡張したということが想定されている^(注1)。

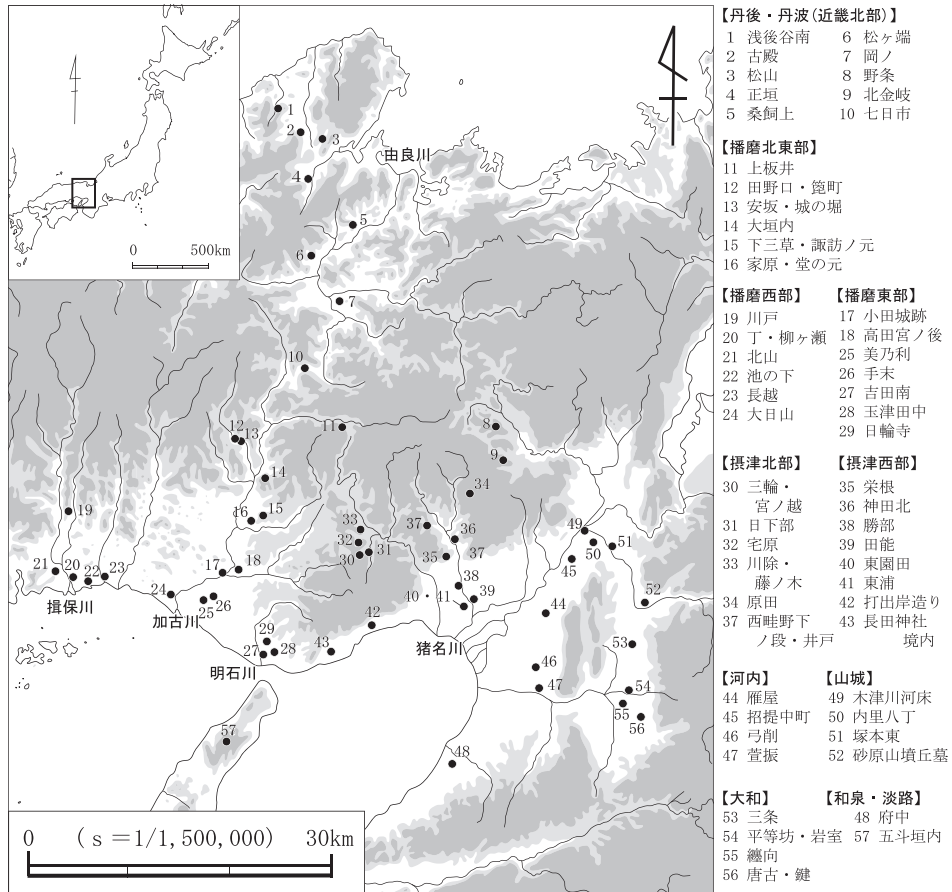
本論では弥生時代後期における近畿北部地域と畿内地域の交流について、これまであまり触れられることがなかった土器から迫ることを目的とする。

2. 研究史と用語の整理

弥生時代後期における畿内地域と近畿北部地域の交流は土器という観点からはそれほど注目されてこなかった。このことは、早くに土器編年が整備された畿内と比して丹後の土器編年の議論が遅れていたことや、鉄製品や玉類、もしくは墓制の広がりなど土器以外の領域の検討が先行していたことに起因しよう。課題であった土器編年も1980年代後半以降の資料の蓄積を背景として、石井清司、肥後弘幸、高野陽子などを中心に編年研究が飛躍的に推し進められた^(注3)。現在では高野が豊富な墳墓出土一括資料を中心に据えて弥生時代後期から布留式初頭までを4期18段階に細別した精緻な編年を提示するに至っている。そして畿内との並行関係について、大和の纏向遺跡出土の近畿北部系土器の時期から丹後の西谷2式新段階と畿内の弥生後期末から庄内式古段階に接点を見出しており、赤坂今井墳墓に象徴される近畿北部勢力の拡張と土器の移動の時期が重なるという重要な指摘をしてい^(注4)る。

このような近畿北部内での研究の進展を背景として、畿内から近畿北部を見通した議論も次第にみられるようになる。森岡秀人は摂津における弥生時代後期末から終末期の土器交流の拠点となった遺跡の立地や性格の検討を行い、他地域産土器の出土傾向やその搬入ルートに関する見通しも述べた。そのなかで摂津の有するあまり認識されていない交流の

側面として、これまで注目されてこなかった近畿北部との交流の窓口であった可能性を示唆している。そしてその具体的な交流ルートとして、亀岡盆地から猪名川流域にいたる、のちの摂丹街道を挙げる^(註5)。また、青木勘時と小池香津江は弥生時代後期末から終末期における大和での近畿北部系土器の出土事例を整理し、それらは山城や丹波など中間地を経由しながら大和までもたらされたものであり、丹後との直接交渉の所産ではないと論じた^(註6)。近年では、四条畷市雁屋遺跡や八尾市弓削遺跡など、1遺跡からまとまって近畿北部系土器が出土した遺跡の存在も知られるようになり、その帰属時期や遺跡の性格をめぐって検討が行われている^(註7)。しかし、あくまでも遺跡単位や地域単位での個別の検討が中心となり、悉皆的な資料集成に基づいた検討はなされていないといえる。議論の素地となる編年研究や資料の蓄積が進んだ現段階において、畿内における近畿北部系土器について検討を行うことは、当該期における畿内と近畿北部の交流の在り方を考えるうえでも多少なりとも意



第1図 本論で対象とする遺跡

義はあろう。本論ではこれまで個別で論じられることの多かった近畿北部系土器にかんして悉皆的に資料集成を行い、その性格について検討を行うことを目的としたい。

本論で対象とする地域は、弥生時代後期において畿内第V様式を共有する範囲およびその周縁部とする。また近畿北部とは、弥生時代後期における土器様式や墳墓の共通性から、丹後を中心に但馬・丹波・若狭という広い範囲を包括する地域をさす。ただし、後述するように畿内ですばしば近畿北部系と報告される土器は、実際に近畿北部から持ち込まれたと考えられるものは主体とはならず、胎土が地元のものであったり、畿内第V様式系土器の中に近畿北部的な土器の要素の一部だけを取り入れただけであり、近畿北部で通有の技術とは異なった技法で製作されたりしているものが多い。また、近畿北部の土器様式を共有する地域内においても器面の調整方法や口縁部形状などで地域差が存在することも指摘されており、近年では類似した土器が播磨北東部の西脇市周辺まで広く分布していることも解明されつつある^(注8)。そのため、本論では土器の出自に関して小地域に立ち入ることは避けておき、一括して近畿北部系土器というようにとらえておきたい。また「〇〇系」土器とは、ある地域の出土の土器のなかで、その地域以外の特徴の一部のみが見られる場合も含む。たとえば、体部はタタキ成形をおこなうものの口縁部形態が近畿北部でみられる形態である甕であっても近畿北部「系」甕として扱う。

3. 畿内地域における近畿北部系土器の集成と検討

以上の前提のもと畿内において近畿北部系土器の集成を行った(第1表)。まずはその様相を概観してみよう。出土時期は後期後葉から終末期前半を中心としており、弥生時代後期中葉、丹後の大山式にさかのぼる資料は摂津北部^(注9)の宅原遺跡の1点(第2図4)のほかに類例を知らない。後期中葉に北陸では近畿北部からの土器様式の影響を強く受け在地の土器様式を改変するほどであったことに比べると、畿内においてはその影響は極めて限定的であったといえる。摂津より北に目を転じると、西丹波から播磨北東部にかけて大山式高杯を模倣したと考えられるような高杯が一定量得られていることから、後期中葉においては摂津北部が近畿北部系土器を製作していた集団との交流の南限であり、畿内中心部にはその影響は及んでいなかったと理解できる。また分布には明確な遍在性があり、地理的に丹波と近接する播磨東部や摂津西部にかけての大阪湾北岸を中心とする地域では分布が密になる。たほう、河内や大和などでは後期の資料はほとんど見あたらない。出土器種は甕や高杯といった日常雑器が中心となる終末期には装飾壺が供献される事例もある。1遺跡からは単一器種のみがみられる場合が最も多く、土器様式として影響を受けるのは限られた地域でしかない。特殊な器種としては、いわゆるコーヒークップ形土器が玉津田中遺跡、

付表1 畿内出土近畿北部系土器の時的傾向

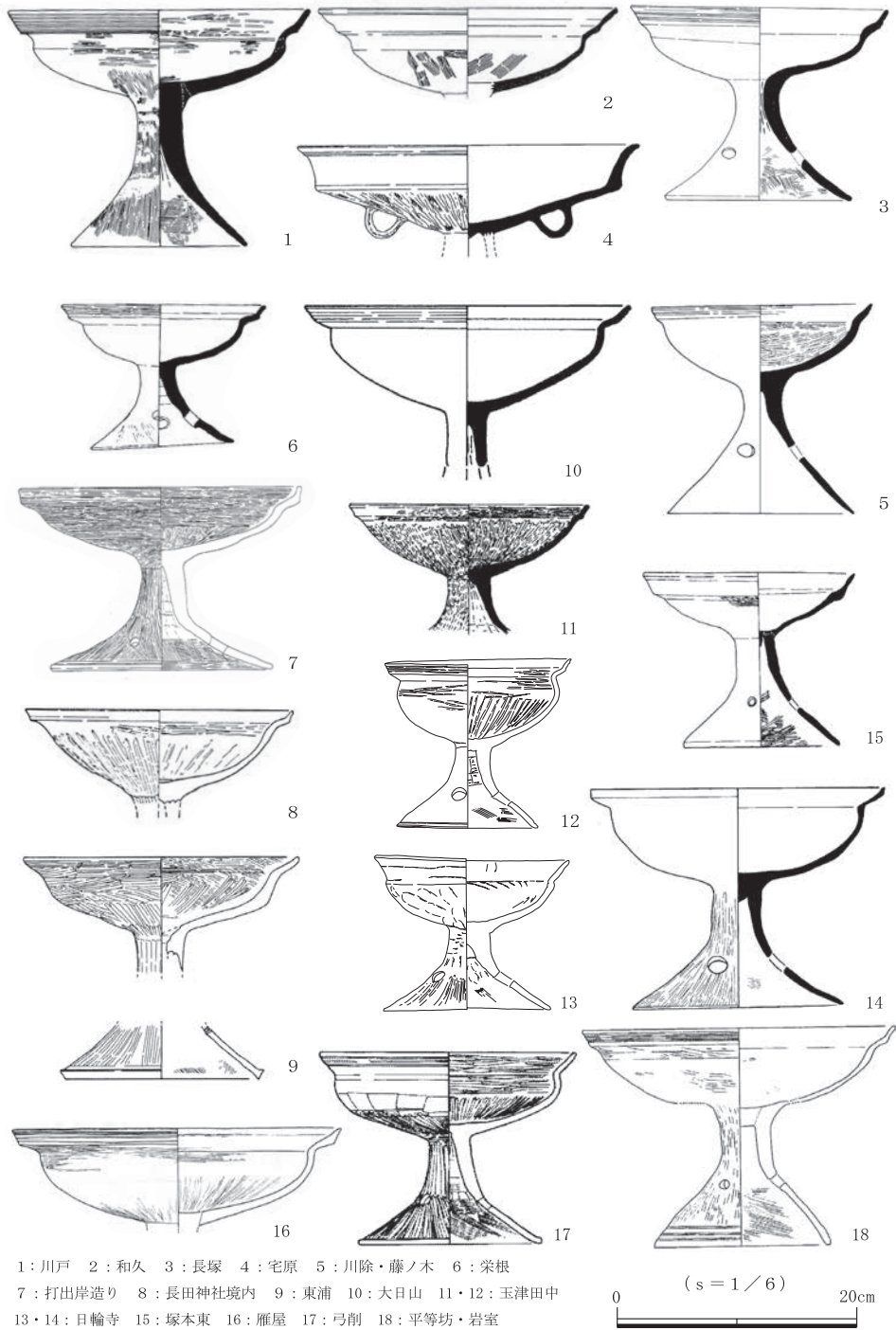
地域 時期	播磨		摂津		河内		山城	大和
	西部	東部	北部	西部	北河内	中河内		
大山3 西谷1古		玉津田中	宅原 川除・藤ノ木					
西谷1新 西谷2		●吉田南 ●玉津田中 日輪寺	●川除・藤ノ木 三輪・宮ノ越 対中 日下部 など	●栄根 神田北 長田神社境内 打出岸造り など	●雁屋	弓削		三条 平等坊・岩室
浅後谷南1 浅後谷南2	●川戸 ●池ノ下 北山	大日山 (土器棺蓋)		東浦 東園田 西畦野下ノ段 ・井戸	招提中町 (時期不明)	萱振 (器台)	●塚本東 ●内里八丁 木津川河床	纏向 平等坊・岩室 唐古・鍵 (時期不明)
浅後谷南3	●丁・柳ヶ瀬 ●和久 鵜石田			東園田	【和泉】 府中	加美 (裝飾壺)	砂原山墳丘墓 (裝飾壺)	

※ 無印：1器種のみ、もしくは甕・高杯のみ ●：3器種以上存在

※ 時期は高野 2006 に拠る。

雁屋遺跡などの4遺跡、脚台付の甕が吉田南遺跡と内里八丁遺跡、播磨西部で数点みられるが、いずれも直接搬入されたものではない。以下では畿内でも比較的出土例のある、高杯および甕にかんして検討を行いたい。

西谷式高杯の展開 後期後葉になると、近畿北部では鉢状の杯部に半環状の把手を持つ大山式高杯に代わり、椀状の杯部に有段口縁をつける西谷式高杯が成立する。西谷式高杯は畿内の弥生後期に通有の有稜高杯とは器形の上でも製作技術の上でも全く異なる独自の型式であり、近年他地域での出土例も認識されつつある。そこで、口縁部の形状に着目して、畿内において西谷式高杯の影響を受けたと考えられる資料の集成をおこなった(第2図)。いっけん播磨西部から河内まで広い範囲に分布しているように見えるが、個別にみていくと、丹後から直接持ち運ばれたものではない折衷型式のものが主体をしめるということに気が付く。第2図では口縁部に注目して資料集成を行ったが、全体の器形としてみると、大きく3種に大別することができる。まず第1は全体の器形が近畿北部でみられるものと共通するものであり、搬入品、もしくはいわゆる臨地製土器をとされるものである。川除・藤ノ木遺跡など摂津北部や播磨東部でわずかにみられるのみである(第2図5・12)。それに対し、中心を占めるのは折衷型式のものであり、杯部は西谷式高杯特有の口縁部を有段に作り出すものであるが、脚部は畿内地域で一般的にみられる有稜高杯と共通するものが多い。これまで近畿北部系土器の事例として認識されてきた栄根遺跡(第2図6)のほか、吉田南遺跡、日輪寺遺跡など摂津から播磨にかけて散見される。また、打出岸造り遺跡(第



第2図 畿内地域における近畿北部系高杯の類例

2図7)で見られるものは胎土も地元のものであることが指摘されている。^(注10)さ第3に口縁端部や全体の器形に西谷式高杯の影響が看守されるものの、形が崩れたものも見受けられる。例えば弓削遺跡出土のもの(第2図17)は器形や口縁部に擬凹線を施すという点で西谷式高杯の影響下で製作されたことが想定されるが、近畿北部では同様の特徴を有する資料は存在せず、地元で変容した形であるといえる。また、畿内系有稜高杯の口縁端部をつまみ上げたようなだけのもの(第2図9など)も散見される。このように見ると、畿内において近畿北部系高杯とされるものの中で確実に搬入品、もしくは臨地製であるといえるのは少なく、ほぼすべてが、直接近畿北部から直接もたらされたというよりは近畿北部の影響を受けているものの、より畿内的に変容したものが中心となるのである。

そのような中、玉津田中遺跡平野地区S D05では後期中葉を中心とする土器群の中で、搬入品の可能性のある西谷式高杯(第2図12)を含む近畿北部系土器が出土している。この高杯は丹後の西谷1式古段階の所産であると考えられ、先に指摘した宅原遺跡出土の大山式高杯に次いで畿内における古い時期の出土例である。明石川流域では玉津田中遺跡以外でも、日輪寺遺跡や吉田南遺跡で口縁部を上方に拡張し擬凹線を施した杯部の破片が複数点出土しており、時期的には玉津田中遺跡例よりも後出する西谷2式以降のものが中心となる。先述したように、吉田南遺跡森友地区では西谷式高杯だけでなく、コーヒークップ形土器、台付甕など畿内の土器様式には存在しない器種も含めて多数の近畿北部系土器が出土しており、畿内のなかではもっとも近畿北部地域との交流を示唆する土器資料が集中する地域である。その明石川流域に次いで近畿北部系土器が多くみられるのが猪名川流域である。猪名川流域では搬入品の存在は知られていないものの、上流域の西畦野下ノ段・井戸遺跡、下流域の東浦遺跡などで点的に西谷式高杯の分布がみられる。中流域の栄根遺跡では後期末の土器群の中に4点の西谷式高杯が報告されており、いずれも杯部の形態から丹後の西谷2式に並行する時期のものともみて大過ない。高杯のほかにも甕や長頸壺にも口縁部を有段につくりだす近畿北部系の土器が出土している。この2地域は畿内のなかでも近畿北部系土器が多い地域として注目されるのであるが、その時期には若干の差異が認められる。すなわち、明石川流域では後期中葉から後葉の資料が中心となるのに対して、猪名川流域では後期後葉から終末期までその影響がみられる。

また、後期中葉における大山式高杯の分布の南限であると理解した三田盆地では、後期後葉でも西谷式高杯が分布している。後期中葉に単発的に近畿北部との土器交流が認められるのではなく、後期中葉から後葉にかけて継続して土器様式に影響を受けていたことが分かる。

周辺をながめると、六甲山南麓や加古川下流域の大日山遺跡などで点的に分布するもの

のいずれも1遺跡からの出土量は1点ないし2点であり、後期後葉における前述の3地域での出土量は突出して多い。また、河内や大和では特定の遺跡からの出土例は認識されつつあるものの、大阪湾北岸のように地域内でまとまって出土する状況はない。興味深い事例として天理市の平等坊・岩室遺跡から出土した高杯(第2図16)がある。全体の器形から見ても近畿北部で見られるものと類似しており、西谷2式新段階に比定される。赤坂今井墳丘墓に象徴される近畿北部勢力の伸長がもっとも顕著な時期に、大和で類似度の高い高杯がみられるようになることは、近畿北部系土器の拡散の背景を考えるうえで興味深い。

甕からみる地域性 高杯と並び畿内で多くみられるのが有段口縁の甕である。丹波から播磨北東部といった西谷式の中心部と畿内とのいわば中間地域には、近畿北部と畿内第V様式^(注11)の中間的な土器様相が展開していることが指摘されている。これらの地域に加え、高杯からみたときに近畿北部との強い関係性がうかがわれた大阪湾北岸地域を含め、近畿北部系土器の畿内への要素の流入の在り方について甕の属性から検討していきたい。

まずは口縁の形状に着目して、甕の系統ごとの比率の変化を検討していこう。本論では甕の口縁部の形状を、

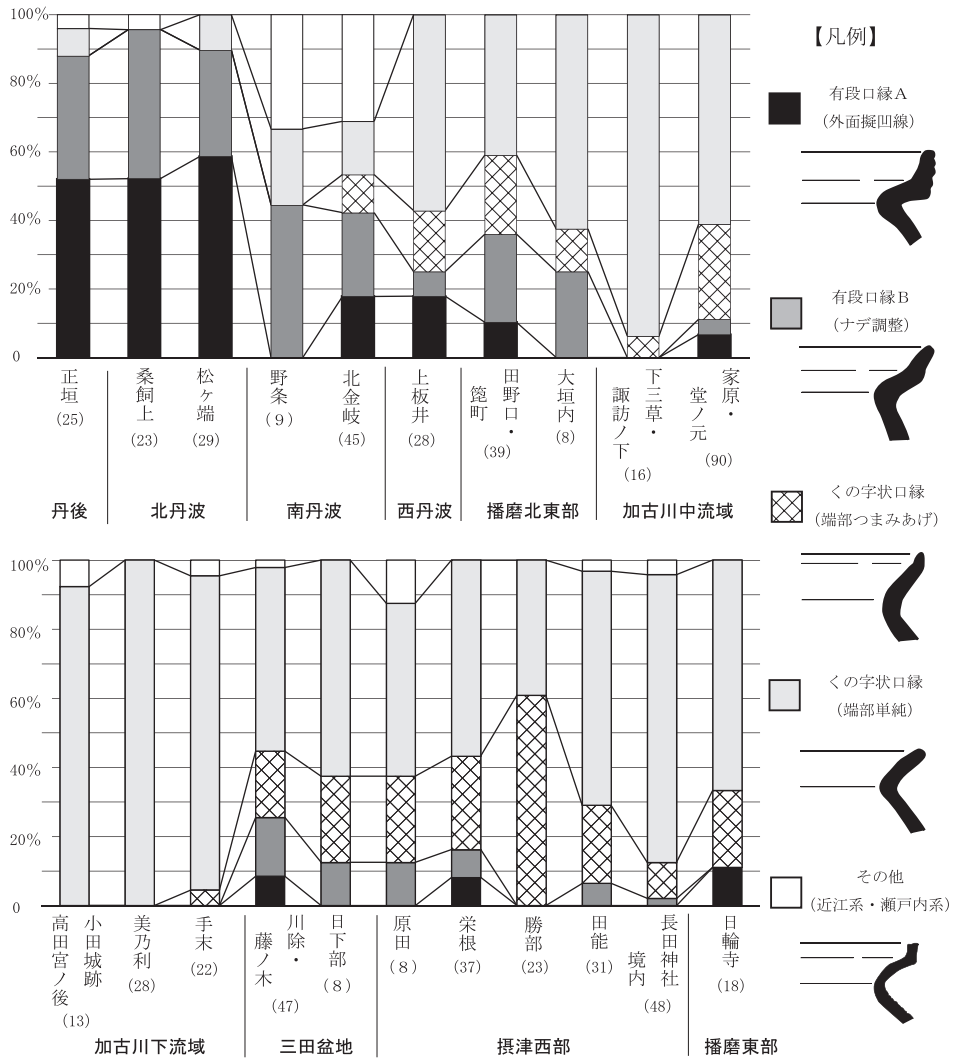
- A) 有段口縁で、外面に擬凹線をもつもの
- B) 有段口縁で、外面に擬凹線を施さずにナデで仕上げるもの
- C) く字状の口縁で、端部をナデによりつまみあげるもの
- D) く字状口縁で、端部を丸く、もしくは面を持つように整形するもの、

というように4大別した。この中で、A、B類は近畿北部系、D類は畿内第V様式系の口縁である。このような分類のもと、丹波から大阪湾北岸にかけてその組成比がどのように変化するか検討をおこなった(第3図)。西谷式の中心をなす丹波から北丹波にかけては有段口縁A・Bが組成の多くを占める。その比率は90%前後であるが、南に移るにつれ次第に率を減じていき、南・西丹波では半数程度、加古川上流域の播磨北東部では30%ほどとなる。かつて都出比呂志が近江系土器の組成の在り方で示したように^(注12)、2地域の中間地域において土器の混在比率が漸移的に変化していく様相を近畿北部系甕と畿内第V様式系甕の間にもみることができる。注意されるのは、その比率が必ずしも同心円状になるわけではないということである。すなわち、加古川中流域までは、その比率は北から南へかけて階梯的に変化するのであるが、加古川下流域では一転してその影響は見られなくなるのである。それに対して、先に西谷式高杯の分布がみられた摂津北部・西部、そして播磨東部の明石川流域では依然15%前後の比率を占める。またC類とした、端部をわずかにつまみあげるく字状口縁は加古川中流域から摂津西部の地域において一定の割合でみられる。その分布域は近畿北部系口縁A、B類がみられる地域と重なっており、近畿北部

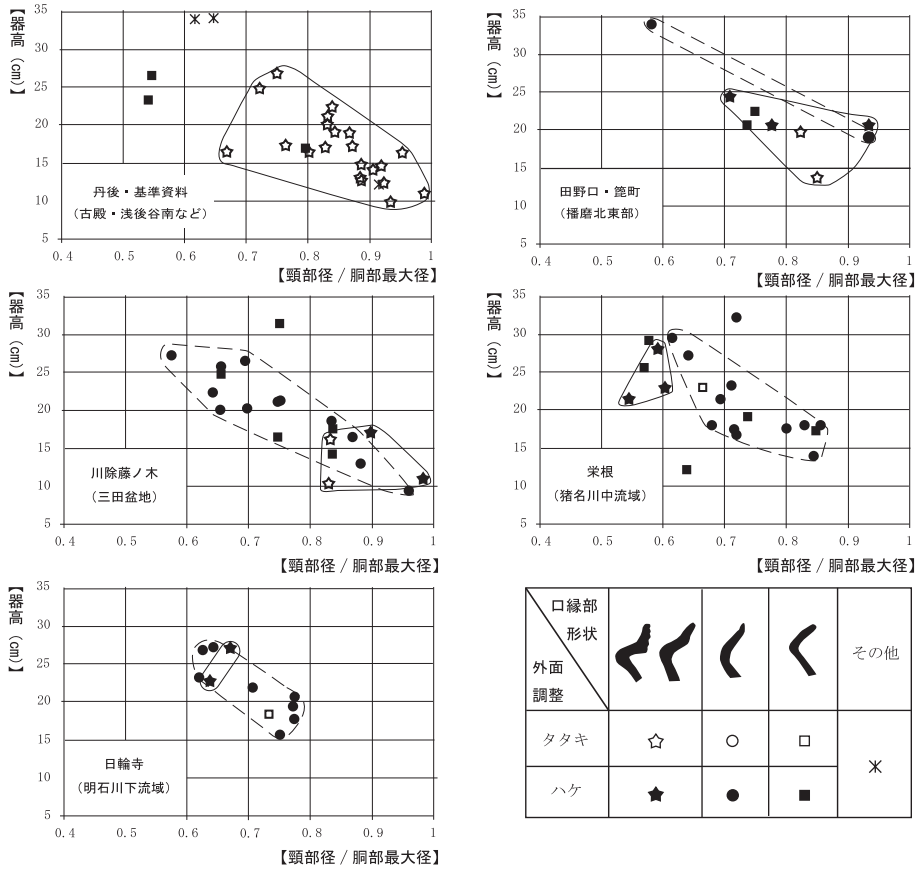
系の土器様式の影響のもとで成立した畿内第V様式系甕の一地域型式であると考える。

以上のように、甕の口縁だけに注目したとき、近畿北部系土器の要素は加古川下流域を經由せずに播磨東部、摂津西部に流入するように見える。しかし、先に高杯の検討をおこなったときと同様、これらの地域で主体を占める近畿北部系甕は、畿内第V様式系の体部に口縁部A・B類が取りつくようなものである。折衷型の甕である。

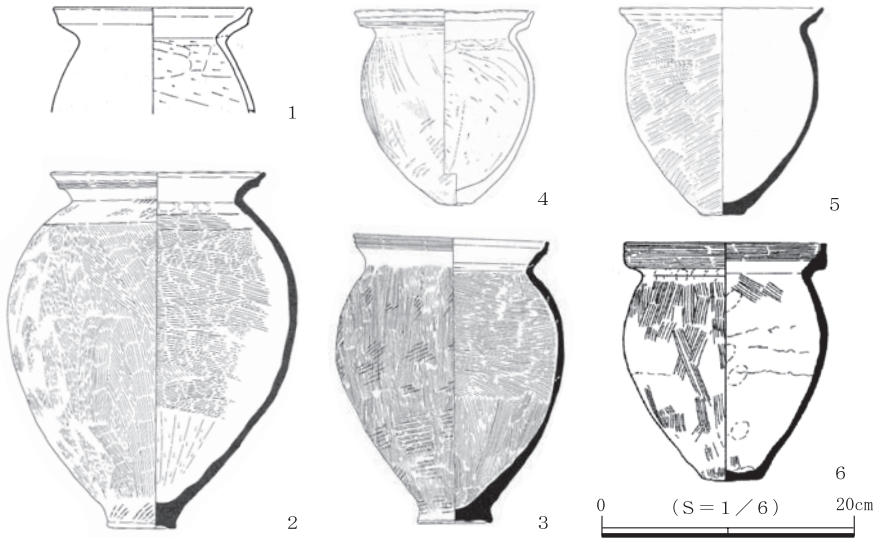
このことを示すため、甕のプロポーシオンと口縁部形状の関係を可視化しようと試みたのが、第4図である。グラフの縦軸は器高を、横軸は頸部径／胴部最大径の値を示した。横軸に示した頸部径／胴部最大径の値は、値が大きいほど胴部最大径が下位になり頸部が



第3図 弥生時代後期後葉における甕の口縁部形態の地域差



第4図 甕のプロポーシヨンと口縁形態の相関関係



第5図 近畿北部系甕の諸例(後期後半)

1: 長田神社境内 2: 栄根 3: 日輪寺 4: 雁屋 5: 川除・藤ノ木 6: 三条

締まった器形に、値が小さいほど胴部最大径が上位になり頸部がひらいた器形になることを表す。この値のことを以下、頸胴指数とよぶ。第4図を見ると、畿内で主体を占めるく字状口縁部を持つ甕は、器高が高くなれば頸胴指数が大きくなりグラフは右下がりの形状を呈しており、器高が高くなるに従って頸部が締まった器形になることがわかる。この傾向を典型的な畿内的な様相とみたい。いっぽう近畿北部において主体を占める有段口縁部ではその傾向は顕著ではなく、器高と頸胴指数の間には相関関係は認められない。すなわち近畿北部においては、甕の器高の高低にかかわらず頸部がひらいた形状になることが一般的であるといえる。

さて、この様相が畿内と近畿北部の中間地域ではどのように変化するのかを検討していきたい。まず、播磨北東部の田野口・笹町遺跡ではB類の分布は丹後におけるA・B類の分布域と大きく変わることはなく、近畿北部系の口縁部をもつ甕のプロポーシオンは近畿北部でみられるものと相違ないといえることができる。さらに南の摂津北部においてもその傾向は顕著ではなく、おおそ近畿北部の分布範囲内に収まるものが多い。摂津北部において組成の主体を占める畿内系口縁部D類を示すグラフは、典型的な畿内第V様式的な様相である右下がりの形状を呈していることから、口縁部形状によって甕のプロポーシオンもある程度規定されているといえる。摂津北部でみられるB類は体部にタタキ目を残すなど、製作技術に畿内第V様式系甕の影響は色濃くみられるものの、プロポーシオンの規範は近畿北部の土器づくりの範疇にある。

一方、大阪湾北岸地域では口縁部の形状にかかわらずグラフは右下がりの形状、すなわち畿内第V様式的なグラフの形状を呈する。すなわち、猪名川流域や明石川下流域では口縁部形態に関係なく頸の締まったプロポーシオンの甕を製作しているということである。また、回転ラセンタタキ技法、分割成形技法といった畿内第V様式を特徴づける製作技術でもって製作されている。これらの地域では「近畿北部系」甕とされる甕が散見されるが、そのほとんどすべてが畿内第V様式的な体部に有段口縁を取り付けるという折衷型式であり、近畿北部の土器づくりの情報は部分的にしか伝わっていないのである。口縁部・製作技術・プロポーシオンという異なった3つの要素から見るとその地域的な広がりも異なっており、とくに中間地域では近畿北部的な要素と畿内的な要素の両者が混在しながら畿内とも近畿北部とも違った折衷的な土器を使用しているといえる。その折衷型式の土器が近畿北部「系」として認識されているのである。

以上のことから、現状の資料からは畿内において、弥生後期の段階では近畿北部から直接土器がもたらされた形跡は断片的なものに過ぎない。短距離がリレー的に連鎖する日常的な交流を行う中で土器づくりの情報の一部が大阪湾北岸地域に流入した結果、「近畿北

部系」壺がみられるようになったのであろう。いっぽう、近畿北部では畿内から直接持ち運ばれたと考えられる土器が散見される。とくに後期中葉から末にかけて、大山墳墓群、古天王5号墓、白米山北墳墓などで生駒西麓産の壺が供献されている事例は興味深い。エリート層の墳墓には継続して畿内の供献土器がもたらされている事例は、当該期の交流の重層性を示唆していると言える。

4. 弥生後期における近畿北部系土器の動向とその後の展開

以上、近畿北部系土器の集成作業と個別の器種の検討を通じて、畿内と近畿北部の交流の在り方について概観してきた。その結果、①これまで畿内では後期後葉から末にかけて分布すると漠然と捉えられていたのに対して、一部地域では後期中葉段階の資料がみられること、②後期段階では摂津西部、播磨東部といった大阪湾沿岸に分布が集中すること、③後期に畿内でみられる近畿北部系土器は、人間の直接の往来の所産というよりは、近距離をリレー式に經由して断片的な影響が及んだ折衷型が多いこと、という3点を示した。

加古川中流域にまで近畿北部系の土器の影響が強くみられるということに関してはこれまでも注視されてきたことである。七日市遺跡の土器を検討した種定淳介は土器製作技術を伝統的に共有し、かつ技術の接触と交流を継続的に維持している領域が時期によって変化していたことを指摘する。この中で、中期までは加古川・由良川の道を通じて南から北へのモノの流れが中心であったのに対し、後期においては氷上回廊に位置する七日市遺跡、加古川中流域の大垣内遺跡の出土土器の様相から北からの浸透圧が増すと論じている^(注13)。本論で指摘した点もこれまで示唆されてきたことと大きく変化はなく、これらの地域においてみられるのは両地域の間間的な土器、いわゆる折衷土器が主体となるということを数量的に示したに過ぎない。

とはいえ、さらに南に目を転じると、その分布は同心円状に広がる訳ではなく、三田盆地や明石川流域、猪名川流域といった特定の地域に集中するということが重要である。というのも、これまで瀬戸内側と日本海側を結ぶ主要ルートは「加古川・由良川の道」であると考えられてきたが^(注14)、今回の検討ではそのような様相は浮かび上がってこないのである。近畿北部と継続的な土器交流が想定されるのは、畿内では三田盆地や明石川流域のごく一部にかぎられている。その土器の多くは折衷型式であり、ただちに直接的なモノの動きと結びつけることはできないが、弥生時代後期後半には由良川から加古川下流域を通らずに三田盆地にはいり、明石川流域もしくは猪名川流域へと至るルートが存在し、その影響下で土器の制作技術を含めた交流が行われていたと考える。福永伸哉は鉄資源の入手を巡り弥生時代後期には瀬戸内ルートが緊張関係にあり、加古川・由良川の道を避け、丹波

から山城をとおり、大和に向かうルートが存在したことを想定している^(註15)。実際、後期から終末期前半において加古川下流域は近畿北部系土器の影響は希薄であるし、弥生時代後期の一時期に加古川下流域を避けて通る交流ルートがにわかに活発になったことは十分想定されうることである。そのような状況下で近畿北部系土器の存在は示唆的である。先述したような栄根遺跡に代表されるような多数の近畿北部系土器の出土事例、そして古墳時代前期の事例ではあるが、山陰系の壺を模したと考えられる小戸遺跡出土の埴輪など、弥生時代後期後葉から古墳時代にかけて、猪名川流域では面的に日本海的要素が広がる。また、後期後半から終末期の近畿北部系高杯が得られている川西市の西畦野下ノ段・井戸遺跡では小型仿製鏡も出土しており、この時期、近畿沿岸部との政治的距離が縮まったことが推察され、近畿北部との交流ルートとして急速に需要が高まりつつある中で登場した集落であることも考えられよう。今後さらに多面的な検討が必要となるが、ここでは加古川下流域に近畿北部系土器の影響は希薄であること、そして加古川下流域よりも東側に位置する地域においてにわかに近畿北部系土器の影響がみられるようになることを指摘しておきたい。

最後に、弥生時代終末期における近畿北部系土器の動きにかんしても概観しておきたい。弥生時代終末期は汎列島の土器移動がみられるようになる時期であるが、畿内において近畿北部系土器の出土例も弥生時代後期と比して微増する(付表1)。山城では巨椋池南岸に位置する内里八丁遺跡、木津川河床遺跡、もしくは木津川流域の塚本東遺跡、砂原山墳丘墓などで点々と分布がみられる。特に塚本東遺跡は土器組成のなかで地元の土胎土作られた近畿北部系が主体を占めるという特異な状況にある。これと同じような現象は播磨西部でも見られる。終末期の播磨西部では「播磨産近畿北部系土器」とでもいうべき、地元の土で製作された近畿北部系土器が多く^(註16)の遺跡で一定数みられるのである。これは前節でみたような折衷型ではなく、調整方法や器形も近畿北部で製作されたものと大過ない、臨地製土器である。例えば、揖保川中流域の川戸遺跡では、組成の20%を近畿北部系の甕が占めるが、そのほとんどは地元の土で製作されたものである。また、池ノ下遺跡の土器でも、甕に限れば近畿北部系土器は組成の23%^(註17)にのぼるが、胎土分析の結果からは近畿北部から搬入されたとは考え難い。筆者が実見した限り、長越遺跡や丁・柳ヶ瀬遺跡、北山遺跡、鵜石田遺跡などにおいても近畿北部系土器は組成の10%ほどは見られるものの、ことごとく地元の胎土でもって製作されている。河内潟沿岸や大和ではこの時期に列島の広範囲から土器が持ち込まれるようになるが、丹波・丹後から搬入された土器を見ることは非常に稀である。近畿北部系土器の分布はあくまでも播磨や山城といった地理的に近接した地域に集中しており、遠距離と直接交渉するような動きは想定しがたいといえる。そのよ

うな点においては後期の在り方と同様であるが、実情としては臨地性土器が多数見られるようになるという、より直接的な人間の動きが背後に見え隠れするという点では大きく異なっているのである。

5. おわりに

本論では土器という日常雑器から、近畿北部と畿内の交流の在り方について若干の検討と考察を行った。あくまでも日常雑器である土器の検討に終始し、交流の全貌を描くことができたとは言い難く、その一側面を指摘したに過ぎない。課題は山積であるが現象面だけを指摘し、今後の検討課題としておきたい。

本論は2012年に大阪大学文学部に提出した卒業論文の一部をベースとして、加筆・修正を加えたものである。卒業論文の作成においては、福永伸哉教授、高橋照彦教授に懇切丁寧な指導を賜った。また、大阪府教育委員会の三好玄氏、兵庫県まちづくり技術センターの篠宮正氏には折に触れてさまざまな助言をいただいた。資料の見学に際しては以下の機関に便宜を図っていただいた。末筆ながら感謝申し上げる。

尼崎市教育委員会、池田市教育委員会、川西市教育委員会、京都府埋蔵文化財調査研究センター、神戸市埋蔵文化財センター、四条畷市教育委員会、太子町教育委員会、たつの市教育委員会、豊中市教育委員会、姫路市教育委員会、兵庫県まちづくり技術センター、舞鶴市教育委員会

(きりい・りき = 当調査研究センター調査課調査員)

注1 福永伸哉『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会。同2002「交易社会の光と陰—時代のうねりと丹後弥生社会—」(『青いガラスの燦き—丹後王国が見えてきた—』大阪府立弥生文化博物館)2000年。

注2 畿内地域とは律令制下の畿内五国に加え、畿内第V様式土器を共有する瀬戸内沿岸の播磨地域を示す。以下、「地域」は省略。

注3 石井清司「丹波・丹後地域」(『弥生土器の様式と編年』木耳社)1990年。肥後弘幸「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年(上)」(『太邇波考古』第7号 両丹考古学研究会)1995年。高野陽子「丹後地域—擬凹線系土器の様式と変遷—」(『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター)2006年。

注4 前掲・高野2006。同「タニワの土器をめぐる交流」(『ふたかみ邪馬台国シンポジウム』7 邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和、香芝市教育委員会 香芝市二上山博物館)2007年。

注5 森岡秀人「摂津における土器交流拠点の性格」(『庄内式土器研究』12 庄内式土器研究会)

- 1999年。
- 注6 青木勘時・小池香津江「北近畿系土器の動態—大和地域の出土資料を中心として—」(『ふたかみ邪馬台国シンポジウム』7 邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和、香芝市教育委員会香芝市二上山博物館)2007年。
- 注7 三好 玄・杉本厚典・野島 稔・深澤芳樹「弥生時代後期後半周溝状遺構に伴う土器群—大阪府四条畷市雁屋遺跡第3次調査から—」(『大阪歴史博物館 研究紀要』第6号、財団法人大阪市文化財協会)2007年。西村公助「弥生時代後期後半の外來系土器について—弓削遺跡第1次調査出土の資料紹介—」(『古墳出現期土器研究』第2号、古墳出現期土器研究会)2015年。
- 注8 安平勝利「Ⅲ まとめ」(『田野口・笹町遺跡』Ⅲ—中町東線建設に係る文化財調査—多可町文化財報告6、多可町教育委員会)2007年。
- 注9 本論では摂津北部とは三田・有馬を中心とする地域及び猪名川上流域を指すこととする。また、猪名川を境に摂津西部、摂津東部というように呼称する。
- 注10 森岡秀人氏の教示による。
- 注11 前掲 安平2007、高野陽子「弥生後期土器の地域色とその系統」(『京都府埋蔵文化財情報』第108号、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009年。
- 注12 都出比呂志「ムラとムラとの交流」(『図説 日本文化の歴史』1 先史・原史、小学館)1979年。
- 注13 種定淳介「第2節 遺物」(『七日市遺跡』Ⅱ、兵庫県教育委員会)1990年。
- 注14 例えば、佐原 眞「大和川と淀川」(『古代の日本』5 近畿、角川書店)1970年。
種定淳介「加古川と由良川—モノの移動について—」(『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ、横山浩一先生退官記念事業会)1989年。
- 注15 福永伸哉「弥生時代の転換期と七日市遺跡」(『七日市遺跡と「水上回廊」』春日町歴史民族資料館)2000年。
- 注16 酒井将司「第2節 川戸遺跡の後期弥生土器—統計的分析を中心として—」(『川戸遺跡—(主)宍粟香寺線県単独道路工事改良事業に伴う発掘調査報告書—』兵庫県教育委員会)2007年。
- 注17 破片資料も含め、筆者自身で口縁部残存率計測法によりカウントを行った。

【第1表、第2図、第5図の出典】

川戸／篠宮 正ほか編『川戸遺跡—(主)宍粟香寺線県単独道路工事改良事業に伴う発掘調査報告書—』兵庫県教育委員会 2007年。池ノ下／篠宮 正ほか編『池ノ下遺跡』中播都市計画事業英賀保駅周辺土地改良区画整備事業に伴う発掘調査報告書 兵庫県文化財報告第435冊、兵庫県教育委員会 2012年。北山／岸本道昭編『北山遺跡』1988・1989年県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書 龍野市文化財調査報告23 龍野市教育委員会 2001年。長越／渡辺 昇編『播磨・長越遺跡』Ⅱ 兵庫県文化財調査報告第375冊 兵庫県教育委員会 2010年。丁・柳ヶ瀬／深井明比古・岡崎正雄編『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第30冊 1985年。鶴石田／渡辺昇編『鶴石田遺跡』兵庫県文化財調査報告第363冊 兵庫県教育委員会 2013年。和久／長友朋子編『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所 2007年。玉津田中／口野博史・阿部 功「28.

玉津田中遺跡第8次調査」(『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会文化財課)1996年。第2図12は神戸市埋蔵文化財センターにおいて筆者が実測・製図。なお、所蔵は神戸市埋蔵文化財センター。池田 毅「19. 玉津田中遺跡 平野地区 第15次調査」(『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会文化財課)2002年。日輪寺／山田清朝編『日輪寺遺跡発掘調査報告書』日輪寺遺跡第4次～第7次調査 神戸市教育委員会 2002年。第2図13は神戸市埋蔵文化財センターにおいて筆者が実測・製図。吉田南／神戸市埋蔵文化財センターにて実見させていただいた。一部は四条畷市歴史民俗資料館編『第20回特別展 青い鳥が飛ぶ—雁屋の男が目指した日本海—』2005年に掲載。大日山／八木哲浩編『加古川市史』第4巻史料編I 加古川市 1996年。宅原／前田住久ほか(『26. 宅原遺跡(内垣地区)』)『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会)1993年。川除・藤の木／山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉編『川除・藤ノ木遺跡—武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』兵庫県文化財調査報告第104冊 兵庫県教育委員会 1992年。三輪・宮ノ越／中井秀樹ほか編『三輪・宮ノ越遺跡—分譲マンション建設に伴う三輪・宮ノ越遺跡第2次発掘調査—』三田市文化財調査報告書第14冊 三田市教育委員会 1998年。栄根／岡野慶隆・祭本敦士編『川西市栄根遺跡—第19次発掘調査報告—』川西市遺跡調査会 1989年。岡野慶隆編『栄根遺跡』川西市教育委員会 1982年。神田北／池田市教育委員会にて実見させていただいた。長田神社境内／黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1990年。打出岸造り／芦屋市教育委員会にて実見させていただいた。東浦／山上真子・高梨政大編『東浦遺跡第17次調査の概要』(『平成18年度 尼崎市埋蔵文化財調査年報』尼崎市教育委員会)2012年。東園田／岡田 務・山上真子編『平成15年度 尼崎市埋蔵文化財調査年報—東園田遺跡第29次発掘調査概要—』尼崎市教育委員会 2009年。雁屋／前掲・三好ほか 2007。招堤中町／山上 弘・山田隆一編『招堤中町遺跡』府宮枚方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1 大阪府教育委員会 2001年。弓削／西村公助ほか編『弓削遺跡第1次調査』公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告142 公益財団法人八尾市文化財調査研究会 2013年。府中／土屋みづほ編『和泉寺跡・府中遺跡—都市計画道路大阪岸和田線整備事業に伴う発掘調査—』大阪府埋蔵文化財調査報告2011-3 大阪府教育委員会 2012年。塚本東／小泉祐司「塚本東遺跡の調査」(『城陽市埋蔵文化財調査報告』第38集 城陽市教育委員会)2000年。内里八丁／竹原一彦・森下 衛編『内里八丁遺跡I』京都府遺跡発掘調査報告書第26冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999年。森下 衛・柴 暁彦編『内里八丁遺跡II』京都府遺跡発掘調査報告書第30冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999年。木津川河床／岩松 保「4. 木津川河床遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第19冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター)1986年。砂原山墳丘墓／中谷雅治・井上満郎「第2節 古墳の文化」(『加茂町史』第1巻 古代・中世編 加茂町史編さん委員会)1989年。三条／秋山成人「20 平城京左京四条五坊四坪・三条遺跡の調査 第420次」(『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』奈良市教育委員会)1999年。唐古・鍵／前掲、青木 2007によると、唐古・鍵遺跡91次調査で近畿北部系高杯の破片が出土しているという。纏向／石野博信・関川尚功編『纏向』奈良県桜井市纏向遺跡の調査 橿原考古学研究所 1976年。平等坊・岩室／青木勘時「平等坊・岩室遺跡(第32次)」(『天理市文化財調査年報 平成21年度』)天理市教育委員会 2011年。石田大輔「1. 平等坊・岩室遺跡(第28次)」(『天理市埋蔵文化財調査概報

平成18(2006)年度』天理市教育委員会)2011年。

【第3図、4図で対象とした遺構】

正垣(SD05)／竹原一彦「正垣遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター)1992年。桑飼上(SH14、15、16)／岸岡貴英ほか編『京都府遺跡調査報告書』第19冊 桑飼上遺跡 公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993年。松ヶ端(SD97001①層)／崎山正人ほか編「V. 今安地区発掘調査概報(松ヶ端遺跡発掘調査)(今安遺跡発掘調査)」(『福知山市文化財調査報告書』第38集 福知山市教育委員会)1999年。野条(SH01)／田代 弘「野条遺跡7次」(『京都府遺跡調査概報』第110冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

北金岐(SD01)／石井清司編『北金岐遺跡』京都府遺跡調査報告書第5冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985年。上板井(旧河道)／兵庫県教育委員会『上板井遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1990年。田野口・窺町(SD05)／安平勝利編 2007『田野口・窺町遺跡』Ⅲ、多可町教育委員会。大垣内(住居跡6・10・11)／山下史郎編『大垣内遺跡—加古川河床改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』兵庫県文化財調査報告第98集 1991年。下三草・諏訪ノ元、家原・堂ノ元／前掲・安平 2007の集計による。高田宮ノ後(SH 8、13、溝1)／岸本直文「第4節 古墳時代」(『小野市史』第4巻(資料編1) 小野市史編纂専門委員会)1997年。美乃利(SH15上層)／兵庫県教育委員会『美乃利遺跡』兵庫県教育委員会 1997。手末SH 1／加古川市教育委員会編『手末遺跡発掘調査報告書』2003年。日下部(SH06)／兵庫県教育委員会『日下部遺跡発掘調査報告書』神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う 兵庫県文化財調査報告第215冊 2001年。川除・藤ノ木(SH 23、34、52、SK 24)／前掲・山田ほか編 1992。原田(5号墓周溝とその周辺)／重金 誠『原田遺跡発掘調査報告書』弥生時代中・後期の方形周溝墓と古墳時代後期の円墳の調査 能勢町文化財調査報告第10集、能勢町教育委員会 1998年。栄根(C地区8～10層)／前掲・岡野ほか編 1989年 勝部(流路1)／森本 徹編『勝部遺跡 大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター調査報告書第100集、財団法人 大阪府文化財センター 2003年。田能(第6Y調査区第2溝)／福井英治編『田能遺跡』発掘調査報告書 尼崎市文化財調査報告集第15集、尼崎市教育委員会 1982年。長田神社境内(SB区土器群)／前掲・黒田編 1990。日輪寺(SK03、04、SH26)／前掲・山田編 2002